

## ジェンダーフリー

三奈木小学校4年

秋吉 真波

最近、テレビやネットでジェンダーフリーという言葉をよく聞きます。最初は何のことか分かりませんでした。母が家事をする時に、

「女やけんせなんちゃんないよ。家事ができるだんなを見つけるとよ。」と言っているのを聞いて、家事をするのに、男も女もないと知り、はっとしました。

私の家は、主な家事は母がしますが、父も自分ができることは何でもしています。とく

に、日曜日は、ほとんど父がしています。母は、

「気が向いた時だけじゃなくて、最後まですればいいのに。」

と言っていますが、休みの日は父がしていることが多いので、父も母も男女関係なく家事をしているのだなと感じます。ただ、やっぱり、母がしていることの方が多いので、家事は女がするという考えが基にあるのかもしれませんが。

私の母は、保育士をしています。よく、家で仕事をしていきますが、準備をしていた時に、「ついつい、男の子が青で、女の子がピンクとなりがちだけど、自由に子どもたちに色を選ばすと、男の子も女の子も、自分の好きな色を選ぶよ。ステキだね。」

と言っていました。青と言えば、「男の子の色。」だと考えてしまう自分がいますが、たしかに私は暖色より寒色の方が好きです。なので青ももちろん好きです。

なんで、青は男、ピンクは女と思ってしま  
うのか不思議です。母は、

「大人の社会が、少しずつ男は青、女はピン  
クと思うようにしてしまったと思うよ。」

と言っていました。私は怖いなと思いました。  
なぜなら戦争があった時も、お国のためにと、  
人を殺すことが良いことのように思っていた  
と聞いたことがあるからです。情報や常識、  
教育は一歩ちがうと怖いことになるのだと  
感じます。だからこそ、自分自身の考えが  
大切になるのだと思います。

家事は、女がするのではなく、青は男の子  
の色もなく、人を殺すことは正義ではない。  
私は、ジェンダーフリーについて考えた時に  
誰が何をするか、何を選ぶかではなく、自  
分が何を選び、何をするかをしっかり考えな  
いといけないと思いました。また、周りに流さ  
れるだけではなく、思いこんでしまわず、自  
分で考えることが、大事だと思いました。そ  
の為に、これから、たくさん事を勉強し

て、たくさん人の意見を聞いて、自分だっ  
たらどうするかをしっかりと考えて行動してい  
きたいです。

## 私のひいおばあちゃん

三奈木小学校4年

田中 遥瑠香

わたしのひいおばあちゃんは、90才です。家

は少しはなれていますが、時々お母さんと会いに行きます。ひいおばあちゃんは目がかた方つぶれているので、たぶんよく見えていないと思います。耳もあまり聞こえていません。こしが曲がっていて歩くのもヨロヨロです。

ひいおばあちゃんは私の名前も覚えきれません。私のお姉ちゃんのことをよくお母さん

の名前とまちがえます。でも、みんなひいおばあちゃんがまちがったことを言ってもおこったりしません。ひいおばあちゃんが、

「もう、何も分からなくなりよる。」

と心配そうな顔で言っても、みんな

「おばあちゃんだいじょうぶよ。」

と声をかけます。

ひいおばあちゃんはこれから色々な事をわすれていって、歩くのもむずかしくなると思います。でも、私はひいおばあちゃんが私の事を分からなくても、大好きです。だから、歩ける間は手をささえたり、いっしょにグーパー体そうをしたり、やさしく声をかけたりしていききたいです。

だれでもみんな、年をとると今まであたり前に出来ていた事が少しずつ出来なくなっていくと、お母さんから教えてもらいました。お母さんは、おじいさんやおばあさんがたくさんくらしているし設で働いています。ごはんを食べた事をすぐにわすれてしまう利用

者さんや、家に帰らないといけないとふ安そうな顔をしている利用者さんもいるそうです。そんな、利用者さんになんて声をかけているのか聞いてみると、

「今、ごはんのじゅんびをしているので、出来たらすぐお持ちしますね。」

「夕はんまで食べて行ってください。そしたら私が車で送りますよ。」

と声をかけるそうです。そうすると利用者さんも安心した顔をするそうです。

私はそれを聞いて、大変だなと思ったのと、やさしくよりそった声かけが大切なんだなと思いました。

私のひいおばあちゃんは、あとののくくらい長生き出来るか分かりません。あと何回会えるのかも分かりません。ひいおばあちゃんがニコニコしてわらっていられるように、遊びに行った時は、

「おばあちゃん大好きだよ。」  
と、伝えていきたいです。

## じゅ業さん観日

三奈木小学校4年

難波 華澄

低学年の内は、母がじゅ業さん観に来てくれるととてもうれしかったのですが、中学年になるとだんだんはずかしくなってきました。

「手をふらないで。」

と私が言うと母は少し笑って、

「はいはい。」

と言い、次のさん観日では手をふらずに、私を見てほほ笑むだけでした。見に来てくれたことはうれしかったのですが、じゅ業が始まる

少し前に来る母に対して、  
「早く来ないで。」

と言いました。母は少しさみしげに、  
「分かった。」

とだけ言って、じゅ業が始まって少し後に来てくれました。すると、友達が、

「かすみちゃんのお母さん来てるよ。」

と教えてくれました。私は、少しはずかしいような気持ちになりました。

そして、その日の夜、

「次は来なくていいよ。」

と軽い気持ちで言ってしまう。母がど  
ういう気持ちになるか考えもしないで。

母はさみしげに、

「そうなのね。ざんねんだな。」

と言いました。来なくていいといったものの、  
四年一学期最後のじゅ業さんかなので  
『来てくれるだろう。』と思いましたが、じゅ業  
中、何度かろう下を見ましたが、母のすが  
たは見えませんでした。勇気を出して手を

あげて、『お母さんが見てるかも。』と思いき生けん命発表しました。発表が終わり、またろう下の方に目をやりましたが、母のすがたはありませんでした。『勇気を出してがんばったのに、なんで来てないの。』と今度ははらがたってしまいました。

家に帰って私がしょんぼりしていたのを見た祖母が、

「おかえり、どうしたの。」  
と声をかけてくれました。

「今日、さん観日だったのにお母さん来なかった。」

「そうだったの。もしかして華澄が来なくていって言ったからじゃないの。」

それを聞いてハッと私が言ったことを思い出しました。夕方、仕事から帰った母は、

「今日、仕事を休めなくて行けなくてごめんね。どうだった。」

と言いました。

私は自分の言ってしまった言葉で来なかつ

たのかもしれないと思ったので、そのことをともこうかいしました。

私は自分の親でも、軽い気持ちで言っはいけないこともあるのだと思いました。

次のさん観日は、絶対に来てもらうことを母と約束しました。

次のさん観日では、母に私のがんばっているすがたを見てもらいたいです。

# あいさつでやさしい町にし

## よう

馬田小学校3年

高着 愛梨

私は、人にあいさつをすることが大スキです。それは、だれかにあいさつをすると相手がよくこんでくれるからです。だから、学校でも、地いきでも進んであいさつをします。はじめは、少しはずかしかったけれど、ゆう気を出して、

「おはようございます。」  
と、言うと、先生たちや地いきの人がえがお

で、

「おはようございます。」

と、あいさつを返してくれます。先生や地いきの人たちのえがおを見ると、とてもうれしくなって、あいさつしてよかったと思います。あいさつは、人をえがおにして、なかよくさせる力があると思います。わたしは、あいさつをする時、先生や地いきの人に、「いつもありがとうございます。ありがとうございます。」という、感しゃの気持ちをこめてあいさつするようにしています。友だちにあいさつする時は、「今日もなかよくしようね。」という気持ちでこめて、

「おはよう。」

と、言います。友だちから元気なあいさつが返ってくると、本当にうれしいです。わたしの心がたわっているような気がします。

でも、あいさつをすることをわすれてしまうこともあります。そんな時は、心のどこかで、いつもやっているからいいやと思ってしまっているのではないかと、反せいします。これでは、

感しゃの気持ち相手が相手につたわらず、せつかくつながっていた心がつながらなくなってしまうからです。

あいさつには、人と人の心をつなぐ力があると思います。だから、どんな小さなことでも、あいさつや感しゃの心を言葉でつたえることが大切です。あいさつをされていやな気持ちになる人はいません。あいさつをすることは、まわりの人をしあわせな気持ちにするのです。

感しゃの気持ちを持ってあいさつすること。人からあいさつをしてもらったら、あいさつを返すこと。あいさつをみんながかわすようになつたら、わたしたちの住む町は、とてもやさしい町になると思います。わたしは、あいさつをすることで、わたしたちの町をやさしい町にしたいです。